

大学の先輩のA子が最近美しくなったので、B子は何か秘訣があるのか聞いてみた。A子は微笑みながら一枚のチラシを手渡した。そこには「気分転換してみませんか？」とのキャッチフレーズとともに連絡先の電話番号が書いてあった。電話してみると男が出て、金曜日の夕方に来るよう勧められた。

とあるビルの一室でB子は男と対面している。

「これから簡単なテストをします。ご自身の右手か左手か、暖かいほうの手を出してみてください」と男が言うので、B子は右手を出した。

「右手の掌を上に向けてください」と言って、男は自分の左手の掌を下に向け、B子の掌に向かい合わせた。何やら熱いものが男の掌から伝わってくると言うのと、男は微笑みながら「第一段階クリアです」と言った。

「逆にしてみましょう」と男が言うので、B子が右手の掌を下に向けると、男は左手の掌を上に向けながらB子の掌を煽っていく。それが感じ取れたので第二段階もクリアした。

「右手はそのままにして」と言いながら、男は左手の甲で煽る。これにはB子も驚いた。男の手の甲から突き抜けるような熱気が感じ取れた。男は満足そうに「第三段階もクリアです。適正有ります」と言った。

この後、体験コースが受けられるとのことなので、それこそ気分転換のつもりでB子は申し込んだ。

「これから起こる事は全て私のせいにしてもらって構いません。まずは祝杯の美酒を」と言いながら乾杯した。甘美な味に酔っているうちに男が両手で包み込むように暖かい気を送ってくるので、B子は、すっかりくつろいでいく。グラスが空になったので、追加して欲しそうな顔をしていると、男は微笑んで口移ししてくれた。より甘美な味がする。吐息が漏れる。ますます暖かい気を送られて喉が渇く。見透かされて、また口移しされる。

B子の震え泣く声だけが響き 夜が更けていく。

「そろそろ始発電車が来るころですね」と男が言い、口移しした。体験コースを終えるにあたり左手の掌を上に向けるように言われた。そのようにすると男は右手の掌を下に向かい合わせてきた。

「お互いの弱いほうの手ですね。どちらが強いか争う必要はありません。いたわりあいましょう」そういういながら暖かな気を送ってくる。余韻を愉しむかのよう

に。
週に一度通うよう勧められ、来週から土曜日の十五時に通うことにした。一回に三十分ほど受けることになるのだが、料金は無料とのこと。ただし此処での事は場所、電話番号も含め他言無用という条件である。良い気分転換になるとB子は快諾して帰っていった。

月曜日になって大学でA子と会ったが、体験コースの事は暗黙の了解で話題にしなかった。

土曜日の十五時、B子は男と対面している。自然と男から美酒を口移しされる。前回より濃くなっている。男から気を送られて、B子の吐息が漏れる。絶妙のタイミングで口移しされるので、B子は震え泣いてしまう。あつという間に三十分が過ぎてしまう。いたわりあつて再会を楽しみにB子は帰っていく。

翌月のある日、B子は友人のC子に最近美しくなったことを指摘され、男から貰っていた例のチラシを手渡した。

C子は早速電話して金曜日の十八時の予約をした。

男からB子に金曜日の十七時半に来るよう連絡があつた。C子の様子を別室で見守るようにとのことであつた。

金曜日の十七時半、B子は男から美酒を口移しされる。かなり濃くなっている。十五分ほど男から気を送られて、別室に移動することになったが、B子は目隠しされてしまう。そのまま別室に連れて行かれ、椅子に座り手足を拘束されてしまった。「これではC子の様子を見守れない」と言おうとする口に美酒を含んだ男の口が蔽ってくる。B子はすっかり酔わされてしまう。

十八時になってC子が来た。男のテストが始まる。ふたりの会話は別室のB子にも聞こえるようになっていく。目隠しされている分、聴覚が敏感になっているB子。少し間があつてC子は左手を選んだようだ。男は今回も左手でテストしていく。よほど左手に自信があるのだろう。第三段階もクリアして体験コースが始

まる。乾杯の美酒とC子の吐息。B子の鼓動が高鳴る。

うらやましがるB子に女が近づいてくる。

「このアシスタントです」と名乗り、B子に美酒を口移しする。この部屋には何人か女性がいるらしいが、声の調子で先輩のA子が分かるだけだった。紹介者の紹介者の紹介者……といったところか。女たちも美酒を口移ししている。C子の震え泣く声に呼応するように女たちも震え泣く。この部屋は防音になっているらしく、震え泣き放題である。

夜が明け、毎週土曜日の十四時の予約をしてC子は帰っていく。男が部屋に入ってきてB子の手足の拘束を解き、目隠しのまま部屋を移動させる。目隠しを外し、美酒を口移す。いつもなら十五時に受けるのだが、金曜の十七時半から居続けたので、男といたわりあってB子は帰っていく。

男は別室に移動し、女たちと至福の時を過ごす。危険な男に魅了された女たち。まるで土曜の午前の恒例のように。

一ヶ月が過ぎた頃、男から電話があり、C子の友人であるD子がテストを受けに来るので、金曜日の十七時に来るよう連絡があった。

金曜日の十七時、B子は男から美酒を口移しされる。ますます濃くなっている。十分ほど男から氣を送られて、別室に移動した。今回は目隠しも無ければ拘束も無い。別室には既にアシスタントがいた。男はアシスタントにB子の世話を依頼して別室を出ていった。

アシスタントから口移しされて、B子は上氣していく。

「くつろぎましょう」とアシスタントが言い、まとっていた服を脱いで一糸まともぬ姿になり、くつろいでいる。美酒に酔っているB子もくつろいでいく。アシスタントの綺麗な肌に何やら描かれているようなので、B子が見とれていると、「この模様が見えるようになったのね」とアシスタントが微笑む。まるで美の化身が描かれているようだ。

間もなくして先輩のA子が入ってきて、くつろいでいく。A子の肌にも模様が描かれているが、アシスタントの模様のほうが格段に華やかである。

A子は来年四月から就職する。その会社に推薦する枠を男は持っているらしい。

それからA子の紹介者が入ってきた。自然とくつろぐ。さらに、その紹介者も。やがて目隠しされたC子が男に連れられて入ってきた。男はC子を椅子に座らせ、手足を拘束し出て行く。

十八時になってD子のテストが始まる。D子は左右どちらが暖かいかわからないようだ。目隠ししたC子の体がビクンとする。

「あなたも本当は分からなかったのね」とアシスタントに言われ、C子が頷く。

男はD子に両方の掌を上に向けさせておいて、左手の掌を下に向けてD子の掌を左右比べる。「左手から冷たい氣が上がってきます。右手のほうが暖かいです」と男が言い、D子は右手で第三段階までクリアした。体験コースが始まり、女たちも美酒を口移ししている。

「あの時は分からなかったので利き腕の左を選んだのです」と目隠ししたままC子が詫びるように言う。

「自分で選んだのだから問題は無いのよ」とアシスタントは答え、美酒をC子に口移す。

体験コースを受け、震え泣くD子の声を聞きながら、女たちも震え泣く。

夜が明け、毎週土曜日の十三時の予約をしてD子は帰っていく。C子が男に連れて行かれ、男といたわりあってから帰った。

男が別室に入ってきた。B子に近づき「描いてあげましょう」と言いながら肌

に模様を描いていく。これでB子もレベルアップしたことになる。男から美酒を口移しされ、歓喜するB子。もう逃げられないのだが、逃げたくないとB子は思った。先輩のA子も、その紹介者たちも経験したことだった。

翌月、また男から連絡があった。D子が誰かを紹介したのかとの予想に反して、C子が実家に帰ったときに母親であるE子から聞かれ、持っていたチラシを渡したところ、今度の金曜日にテストを受けにくるので、十七時に来るようにとのことであった。

金曜日の十七時にB子は男に促されて別室に入った。既にC子とアシスタントがいた。前回と違って服を着たまま美酒を口移しされた。先輩のA子、その紹介者たちも入室し、C子の母親E子を待った。

母親E子は右手を選んだ。男は初めて右手でテストする。別室の女たちは普段と違う展開に注目している。テストというよりも、いたわりあっているようだ。

「これはアシスタント経験者の手ですね」と男はE子に言った。

「ええ元夫のアシスタントをしていました」とE子は答えた。

別室の女たちに緊張が走る。ただアシスタントは既に知っていたようだ。

「まずは美酒で乾杯しましょう」と男はE子に言い、美酒を飲みながら、いたわりあっている。久しぶりのいたわりにE子が震え泣く。

別室でも女たちがいたわりあいながら震え泣き、夜が更けていく。

E子が元夫との事を語り始める。別室では女たちが耳を傾ける。

「嫁いで二年して娘が生まれました。夫は大喜びしたのですが、月日が経つうちに何やら葛藤しているようでした。ある夜、夫から娘の肌に模様を描きたいのだと告白されました。やはり夫も黒い欲望に捕らわれたのかと私は思いました。思いとどまるように説得することも出来たはずなのですが、取り憑かれたような夫を見ると、心を鬼にして娘の肌を夫に差し出したのです」と言ってE子はすすり泣く。

別室では母の話にC子が震え泣く。

「物心もつかない娘に美酒を使うわけにはいかず、邪気というより本気で夫は描き始めました。邪気の化身のように夫は描き終えました。娘の肌には美の化身が描かれました」というのを聞いて別室の女たちはアシスタントを見た。

C子は訳が分からない様子なので、アシスタントは「皆さん、くつろぎましょう」と言って、くつろいでいく。アシスタントの肌の模様を見て、C子が「まあ綺麗」と言うので、アシスタントは「この模様が見えるのね」と微笑む。

他の女たちも、くつろいでいく。それぞれの肌には模様が描かれてある。C子もくつろいでいく。その肌には、アシスタントのと瓜二つの美の化身が描かれていた。今やC子にも自分の肌の模様が見える。

「それじゃアシスタントさんも、私と同じで、お父様に描かれたのですね」と言うC子に、アシスタントは頷く。

母の話は続く。

「描き終わると夫は本部に禁を犯したと連絡しました。程なくして、本部の方々がやって来ました。まず離婚届を書くように言われ、本部が用意する住居に娘と引っ越すようにとのことでした。夫は本部預かりとなり、使っていた美酒も没収されてしまいました。それ以来、私は美酒を飲むことが出来ず、今夜は久しぶりの美酒に、すっかり酔ってしまったようです」と言いながら、男から美酒を注いでもらう。

別室の女たちも口移しあい酔っていく。

「当時通ってきていた女性の方々を、何人かの先生が引き継がれたようですね」という母に、男は「私の父の所にも数名来られたようです」と答える。

別室でC子が「アシスタントさんも、その時来られたのですか」と聞くと、「いえ。あなたと同じで私も自分の肌に模様が描かれているとは知らず、五年前に先生からテストを受けたのです」と答える。

「娘は左利きです。箸と鉛筆は右手を使うように仕付けました。それ以外は放っておきましたが、とつさの時には左手を使ってしまうようです。ところで夫の事で何かご存知ですか」と母は聞くが、男は「それにはお答えできない決まりになっています」というので、母は「もつともですわね」と言った。

「隣の部屋の事はご存知でしょうから移動しましょう」と男は母に促し、別室にふたりで入ってきた。

「皆さん、すっかりくつろいでいらつしやいますね」と言いながら、母もくつろいでいく。母の肌にも美の化身が描かれているが、女手ひとつで娘を育てた貫禄が加わっている。凜とした三体の美の化身に女たちの感嘆の吐息が充満する。

「お母さんには顧問アシスタントになってもらいましょう。本部の内諾は得ています」と男が提案すると、「それは名案です。いろいろ教えてください」とアシスタントは喜ぶ。実は男もアシスタントもC子がテストを受けた時から、肌に模様が描かれている事を見抜いて本部に報告していた。禁を犯した罰は全て父が受ける事で、母や娘が責められる事ではない。それが本部の方針である。

「私もアシスタントになりたいです」というC子に、「まず大学を卒業しなさい。それからアシスタントになるための研修を受けるといいわ」と母が言う。「このまま通って、卒業したら此処で研修するといいでしょう」と男も勧める。

母にも娘にも進路を決める夜になった。祝福の美酒に一同酔いしれていく。そのまま土曜日の午前の恒例が繰り広げられた。

「私も四月に向けて先生から研修を受けているの」と先輩のA子が楽し気に言う。私も先生から推薦してもらいたいとB子は思った。それを男は見抜いてB子に微笑んだ。この場に招かれていないD子には内緒の事である。

四月になり、先輩のA子は内定していた会社に晴れて就職した。A子から手渡されたと言ってチラシを持ったOLが、その会社からも時折テストを受けに来る。その度にA子は別室に招かれる。ますますA子の美貌に磨きがかかっていく。

男はB子にA子とは別の会社の面接試験を受けるように勧めた。面接試験といっても競争相手がいるわけではない。試験の時刻に遅れなければ面談して内定をもらえる。B子は無事クリアした。男に報告すると「おめでとう。これから卒業まで研修だね」と言った。

研修は将来秘書になることを見越してのものである。就職先からも研修依頼されていることである。平日の夜は研修のあと、別室で定期的に通うOLの様子を、アシスタントとくつろぎながら眺めるという役得もある。アシスタントの見習いも兼ねてC子も同席している。月曜から木曜の夜は一時間刻みにOLの予約で埋まっていた。

A子は月曜日の十九時に通ってくる。B子は一年後の自分の姿を想像してA子に重ね合わせる。その日はC子の母E子も顧問アシスタントとして別室でアシスタントを指導していた。C子は母との再会に喜ぶ。C子からチラシをもらいテストを受けたD子は、この日も招かれる事なく取り残されていた。A子が別室に入ってくると、さながらあの日の同窓会のようなであった。凜とした三体の美の化身には敵わないまでも、A子の肌の模様は、あの日より美しくなっていた。

数週間後の金曜日、D子からチラシをもらったF子がテストを受けに来た。別室には目隠しされ椅子に拘束されたD子。アシスタント、A子、B子、C子はくつろいでいる。

F子は左右どちらが暖かいかわからないようだ。男が判定して左手でテストを受けたが、第一段階もクリア出来ない。別室では女たちの落胆の声。「残念ですが、きょうのテストの記憶を消させてもらいました」と男は言い、F子は帰っていった。

男が別室に入ってきてD子の手足の拘束を解き、目隠しのまま部屋を移動させる。目隠しを外し、美酒を口移す。男といたわりあってD子は帰っていく。

「こんな事もありますよ」と男は言い、別室で長い夜を過ごし、土曜の昼近くまで、女たちとくつろいでいた。

「紹介者としてD子は、かなりショックだったでしょうね。大丈夫かしら」と心配そうにC子が言うと、男は「よく気が付きましたね。実は美酒を口移した時に、昨夜の記憶を消してあげました。十三時の予約は覚えているでしょうから、そろそろ来るはずですよ。この部屋で見学を希望する方は、このままどうぞ」と言った。女たちは笑みを浮かべ、全員別室に待機している。

十三時にD子が来た。別室の女たちの安堵の声。三十分の定期コースを受けてD子は帰った。

男が別室に入り「無事、記憶は消えたようです。昨夜の事はD子さんにもF子さんにも秘密にしておいてください」と言い、長い宴はお開きになった。

ノルマがある訳ではないので、あれ以来D子からチラシをもらったと言ってテストを受ける人がいません、B子、C子、D子は卒業した。

卒業式が終わり、久しぶりにB子は実家に帰った。一人暮らししている母はB子を見るや否や「綺麗に描いてもらったわね。くつろぎましょう」と言う。くつろぐ母の肌にはC子の母と同じ美の化身が描かれていた。

「それじゃ母さんは別れた父さんのアシスタントだったの？」と聞くと、微笑みながら母は頷く。父は黒い欲望を本部に告白し、そのまま本部預かりとなった。美酒を没収されるのはC子の場合と同じ。その夜、母と娘は心いくまでいたわりあった。

別室にB子は母を伴って入った。「先生にお逢いして、是非ご挨拶したい」と母の申し出を男は快諾し、日時を調整したのである。別室ではアシスタントが既にいて「くつろぎましょう」と促す。二体の美の化身に見とれながらB子もくつろぐ。

男が入って来てB子の母に美酒を口映す。久しぶりの美酒に母は酔い痴れていく。

夫が本部に黒い欲望を告白した日の事を思い出し「本部の人がやって来て、離婚して娘と引越すように言われたのですが、当時通って来ていた方々は、誰が引き継がれたのでしょうか」と母が聞くと、「私の父も何人か引き継いだようです」と男は答えた。

「そうでしたか。それは有難うございます。当時娘は三歳になったばかりでした。夫は『これ以上待つと娘が物心つくので、肌に模様を描いた場合、その夜の記憶を消してやらねばならなくなる』と言い断念しました。日に日に黒い欲望が高まるのをさすがに抑えきれず、本部に告白したのです。夫が自らに描いた邪気の化身の模様も本部の人によって消されてしまい、意気消沈して夫は本部預かりになりました」と言い震え泣く。

男は母に顧問アシスタントになることを提案した。母は快諾した。「美酒が飲みたくなったら、いつでもお越しく下さい」と男は微笑み口移す。

当時、本部は大変だったようである。C子の父から禁を犯したという告白があって、数日後にB子の父から黒い欲望の告白である。二組の母娘は本部が監視しながら、生涯資金援助することになった。父が全ての責任を負うという本部の方針である。

本部預かりとなった父ふたりは技量を買われて、本部の道場で指導することとなった。妻とも娘とも別れ、会うことも許されず、道場で汗を流して発散するしかなかった。肌から消された邪気の化身の模様の代わりに、囚われの身の模様を描かれてしまった。禁を犯した分だけ、C子の父にはより醜悪な模様が描かれた。美酒も飲まずに自力で模様を消さなければならない。

父ふたりは、この道場で研修を受けた同期である。毎月行われる紅白勝ち抜き戦では、それぞれ大将を務め、実力は互角であった。奇しくも伝説の二人が再会したわけである。

B子とC子が同じ大学に入学した時、本部にプロジェクトが立ち上げられた。当時二年生だったA子が、四年生になってからB子にチラシが手渡されるように仕向けるプロジェクトである。B子が別室で会ったことのあるA子の紹介者は当時三年生で、そのまた紹介者は四年生で、全員この時本部の担当者が選んだ。そうとは知らない女たちによって、計画は成功した。

A子は勤めて半年後に、その会社の秘書になった。引き続き月曜日の十九時に三十分の定期コースを受けるため通っている。

B子は火曜日の十九時に通うことになる。

C子は男の所でアシスタント見習いとして、定期的に本部の研修を受けることになった。父の行方は不明で、本部の道場に居たことも知らされていなかった。D子は就職活動の結果、都内の会社に勤めることになった。水曜日の十九時に定期コースを受けに来ることになった。

F子はテストの記憶を消されているので、あれ以来関わらないまま都内の会社に勤めたようである。

B子とC子が入学した時に立ち上げられたプロジェクトは成功裏に解散した。

四月になって、B子の会社勤めが始まった。人事関係の仕事をするようになった。勤めてみて分かった事だが、会社の経営陣は本部から派遣されている。会社のビル全体が本部の所有であるから当然と言える。A子の会社も同様である。道理で男が就職の推薦状を持っているはずである。プロジェクトの舞台を提供した成功報酬のようなものである。

B子の日々の業務は定型的な事務処理で、毎日定時に帰れる。火曜日の十九時に三十分の定期コースを受けるため男の所に通っている。いつも早めに着くので、定期コースの前後は役得として別室でくつろぐ事が多い。

別室では常駐のアシスタントと、見習いのC子。時には顧問アシスタントとしてC子の母。そして母。母ふたりは好物の美酒に酔い痴れていく。次第に火曜日の夜の宴が恒例になっていった。

勤めて半年して、B子は秘書になった。男から受けた事前研修の成果の見せ所である。スケジュール調整のためA子の会社に連絡する事もよくある。

十一月になって、男から就職の年次報告のため本部に行くよう言われた。会社は先刻承知で、十時に本部に着くよう車を手配してくれた。

本部に着いてみると、ロビーに男とA子が居た。本部の担当者に連れられて、三人は会議室に入った。

A子は昨年も報告に来ていたので、男はB子を本部の出席者に紹介した。それぞれの会社に勤めてみての感想を述べるだけの報告会だった。

報告会が終わるや否や会議室のドアが開き、何人か入室してきた。アシスタント、C子、顧問アシスタントとしてC子の母。そして母。さらに制服姿の警備員が二人。そのうちの一人はB子の会社の警備員である。「我が社の警備員も居るわ」とA子が言う。

本部の担当者がA子の会社の警備員を「B子さんのお父さんです」と紹介する。驚くB子。涙ぐむB子の母。続いてB子の会社の警備員を「C子さんのお父さんです」と紹介する。泣き崩れるC子を母は抱きかかえる。

「本部預かりになって二十年経ちました。ふたりの精進に敬意を表し、無罪放免とします」と言って、父ふたりに証書が手渡された。「復縁は可能ですが、娘さんふたりには引き続きひとり暮らしをしてもらいます」と本部から言い渡された。

実はテストからもそうなのだが、結婚するまではひとり暮らしするのがコースを受ける条件になっている。宴が深夜に及んでも支障ないようにするためである。

二組とも復縁することになった。一同の祝福の拍手が鳴り響く。

「おめでとうございます。別室に祝宴の準備がしてあります。明日まで出張の扱いになっていきますので、心いくまでくつろいでください」と言って担当者が別室に誘導する。「何かありましたら内線9番にご連絡ください」と言って担当者は退室した。

マジックミラーになっていないので隣の部屋の様子が見えない以外は、完全防音で、さすが本部の別室だけあって設備は豪華である。

男の司会で宴が始まる。グラスに注がれた美酒で乾杯。二十年ぶりの美酒に父ふたりは酔い痴れる。

女たちがくつろいでいく。三体の美の化身。見とれるA子もB子も互いの模様が美しくなってきたのに気づく。

男たちもくつろぐ。三体の邪気の化身。女たちの吐息。

いたわりあいながら口移し、いつ果てるともない宴とともに夜が更けていく。

名残惜しそうに宴がお開きになったのは、翌日の昼過ぎだった。

父ふたりは本部が用意した独身寮から出て、それぞれ復縁した妻と暮らし始めた。嬉々として、それぞれの会社に通い、警備員の仕事にいそしんでいる。娘ふたりには月に一度、実家に帰ることが許された。男から美酒をもらって帰り、それぞれ親子三人での宴が楽しみになった。

年が明けて、男の長男が本部での研修を終えて帰ってきた。当面は男の助手として実務経験するらしい。

役得で別室から見学しようという女たちで賑わうようになった。

A子もB子も、それぞれの定期コースの前後は別室に入り浸っている。

D子は相変わらずのマイペースで、定期コースだけを受け続けている。

長男の結婚相手を別室で選ぶ話が持ち上がり、ますます女たちが騒がしくなる。独身女性で希望する者を、ひとりずつ長男が面談する。

A子もB子も真っ先に希望した。C子も希望したのだが、父が禁を犯して美の化身を描いているので正妻になることができない。アシスタントも同様である。

D子は蚊帳の外なのだが、勤務している会社で玉の輿に乗る話があるようで、平然としている。

長男の面談は別室で連日行われた。A子もB子も最終候補に残り、甲乙つけがたく、同点になったのだが、紹介者優先ということでA子に決まった。

翌日、B子は社長に呼ばれ、本部で研修を受けるよう命ぜられた。実は将来の役員候補に生え抜きの社員を抜擢するのだが、その社員はひそかにB子に好意を持っているらしい。今のうちに社員を手名付けておこうという狙いで、骨抜きにするための研修を受けることになる。

本部に行ってみると担当者に案内され、第二研修棟の一室で研修を受けることになった。研修のメインは料理である。家に招き社員の胃袋をつかもうという狙いである。実際に結婚すれば本部から家政婦が派遣されて料理するのだが、毎日食べたいと思わせるほどの料理を作れるようにしなければならない。

本部での研修の後の時間をB子は別室で過ごし、構わないという役得もある。

長男と結婚するため、A子が退社することになり、後任の秘書を連れてB子の会社を訪ねてきた。なんと後任はF子である。テストで第一段階もクリア出来なかったF子である。

「はじめまして。よろしくお願いします」というF子。男にテストの記憶を消されていることに感心しながら、A子とB子は微笑みあつた。

実はB子より先にF子は本部で料理研修を受けたのだが、女たちは知らされていない。

F子もB子と同様に、新しい会社の将来の役員候補となる生え拔きの社員を骨抜きにするという密命を帯びている。

長男の結婚相手になった女の後任をF子にするという本部の狙いは成功した。

本部での研修を終え、B子が会社に戻ると、例の社員は内に秘めた恋で迎えてくれた。無言なのだがB子は確信した。

どうやって自宅へ食事に招こうかと考えるB子は、その夜、不思議な夢を見た。

わたしは あたり いちめんの ひらがなに つつまれているようでした
ふとみると ひとりの じよせいが ものがたりを したためています
どうやら むらさき しきぶ のようです
ものがたりの ひょうばんを きいて みかどが おわたりになります
どこからともなく がくが きこえてきます
なんと みやびなのでしょう と わたしは うっとりしてしまいました

という夢であつた。

翌日、社長室に呼ばれ、土曜日に例の社員を社長の家に招待するのだが、B子も同席するように言われた。料理研修の成果を発揮してもらいたいとのことである。

「料理には特製スープが必要です」とB子が言うと、そのスープなら我が家に有るから使うといい」と社長は答える。役員の家には住み込みの家政婦が居て、料理に特製スープを使うのが常である。当日は家政婦を待機させておくが、B子が料理して社員を驚かせて欲しいとのこと。

自宅に社員を招く手間は省けたので、昨夜の夢のように雅なもてなしをしようとB子は思った。

土曜日になった。B子は社長宅で料理している。居間では社員が社長夫妻と向かい合い恐縮している。料理を運ぶと社員は驚いたが、ひと口食べて感激している。もちろん特製スープを飲んだからなのだが、完全に胃をつかまれたようである。このような料理を毎日食べられたら、どんなに幸せだろうかと思っている。

「驚かせたようだが、気に入ってもらえたようだね。ふたりさえ良ければ、私たちが媒酌人になっても良いのだが」と社長が言うと、「お願いします」と社員は即答。微笑みながらB子も「よろしくお願いします」と答える。こうして社長の計画は成功した。

帰り際に社長夫人がB子に何やらささやくと、B子は微笑みながら例のチラシを手渡した。

社長夫人は金曜日の十時に予約した。

男からB子に金曜日は朝から別室に来るよう連絡があった。会社には本部から外勤扱いにするよう連絡済みであるとのことであった。

金曜日の朝。B子は別室でアシスタントと一緒にくつろいでいる。

十時になって社長夫人が来た。男のテストが始まる。社長夫人は右手を選び、第三段階までクリアした。

体験コースが始まり、社長夫人が震え泣く。

再来週から毎週月曜日の十時に定期コースの予約をして社長夫人は帰っていく。

男が別室に入ってきて、B子に美酒を口映す。

毎週月曜日は外勤扱いにしてもらうよう会社に依頼するとのことである。結婚前の研修を別室で男から受けることになる。

数週間後の土曜日。ホテルで社長夫妻から役員夫妻たちに、社員とB子が披露された。まずは男部屋と女部屋に分かれて披露される。

男部屋では緊張した面持ちの社員。将来の役員候補との社長の言葉に上気する。

女部屋ではB子の美しさに夫人たちの感嘆の吐息。社長夫人に促されてB子は例のチラシを役員夫人たちに配る。

昼食の準備が出来たとの声に、一同移動して夫婦で席に着く。

和やかなうちに披露が終わり、役員夫人たちの予約電話の応対に男は追われた。

金曜日に二人しかテストできないので、金曜日にもB子は外勤扱いになった。

結局、役員夫人たちは全員テストをクリアし、定期コースを受けることになった。

A子は長男と結婚し、長男の正アシスタントになった。正アシスタントは正妻だけに与えられる称号である。本部での研修を終えて長男と別の階のフロアで独立開業することになった。別室のアシスタントにはC子が選ばれた。C子の母E子は顧問アシスタントとして付いてきた。A子は別室の奥の部屋にいる。その部屋には長男とA子しか入れない。

D子は玉の輿に乗り、昼の定期コースを受け続けている。

A子の後任秘書になったF子は、社長からの密命を果たし、役員候補と婚約した。

ここでF子がテストをクリア出来なかった時に話を戻す。

F子は駅に向かって歩いていった。途中で空腹を覚え、香りに誘われてレストランに立ち寄った。

出されたスープの美味しさに驚いた。レストランの支配人に感想を述べると、今夜スープの講習会があるとのこと。早速申し込み、迎えの車に乗って講習会の会場に行った。

講習会では、いろいろな料理にスープが合うことを体感し、希望者は合宿に参加するよう勧められ、F子は希望した。

合宿は個室で男性とマンツーマンで行われる。グラスに注がれた酒で乾杯する。スープと同じ成分のアルコールである。例の美酒である。F子は美酒に酔いしれ、くつろいでいく。気が付くと朝になっていた。F子は毎週金曜日の合宿に通うことにした。

実はF子の立ち寄ったレストランは本部の系列である。テストをクリア出来なかった女性を誘うように仕組まれている。

講習会の会場は本部の第二研修棟である。

合宿はスープの成分を抽出するために行われている。

そして今もF子は合宿に通い続けているのである。

B子の婚約者は役員に抜擢された。ほどなくして社長夫妻の媒酌で盛大な結婚式が挙げられた。B子は退職して、役員用の家に引っ越した。

平日は夫の出勤を見送ると、家政婦に家事を任せて、別室に通った。

真昼の美酒は格別である。来る日も来る日も酔いしれていた。

ある日、F子が来て男と面談している。F子も結婚したのだが、合宿は未婚の女性しか参加できないので、本部から紹介されたのだという。テスト無しに美酒で乾杯し、いたわりが始まる。三十分してF子は帰った。事前予約すれば何度でも通えるらしい。

半年してB子は懐妊した。出産までは別室通いは出来ない。美酒も飲めない。

男児を産み、別室通いを再開した。

F子は女の子を産んだようである。

男の長男の妻であるA子は男児を産んだ。邪気の使い手である長男は大喜びして赤飯で祝った。禁を犯す心配が無いからである。そして将来の後継者になる可能性も高いからである。

本部からは毎年誕生日に健康診断に来るよう指示があった。その際に邪気の使い手になれるか否かのテストも実施される。

アシスタントもC子も未婚のままである。

玉の輿に乗ったD子は優雅に定期コースを受け続けている。

F子は事前予約して通ってきている。

男の長男には双子の弟がいる。男の次男になるのだが邪気の使い手にはなれず、本部の第二研修所で合宿を担当している。実はF子の合宿のパートナーになっていた。F子が結婚することで合宿に参加できなくなると相談された時に、F子に父を紹介したというわけである。

B子は一児を産んだ安心感から、平日は別室さんまいしている。果てしなく美酒に酔っていく。

玉の輿に乗ったD子が懐妊した。出産までは定期コースを受けられない。名残惜しそうに帰っていった。

B子の長男が一歳の健康診断を本部で受けた。邪気の使い手にはなれないようである。健康診断を毎年受けるよう本部から指示された。それを聞いてB子の両親は安堵した。

A子の長男は邪気の使い手になる素質があると診断された。男は孫に邪気の入門を教えられると喜んだ。

D子は女の子を産んで、定期コースに復帰している。あいかわらずのマイペースである。

B子は以前よりも足しげく別室さんまいしている。ますます美酒が濃くなっている。心に潜む黒い炎が燃えさかる。

B子は別室の奥の部屋の扉を眺めている。男と正妻しか入れないはずの部屋なのだが、アシスタントとC子も入れるらしい。実は扉の向こうは通路になっており、アシスタントとC子は奥の別室に出入りしているのである。当然のことながらアシスタントもC子も、その部屋のことは口止めされていてB子の質問には答えてくれない。答えるかわりに美酒をB子に口移しする。その部屋の事など忘れてしまいそうなほどにB子は酔っていく。

B子が第二子を懐妊した。奥の別室どころではなくなった。男に出産まで通えないと告げると、男は名残の美酒を口移ししてくれた。アシスタントとC子にも挨拶してB子が帰っていく。見送る二人は奥の別室の事を話さずに済んで安堵した。

B子はまたしても男児を産んだ。D子はまた女の子を産んだようである。

B子の次男は一歳の健康診断を本部で受けて、邪気の使い手になる素質があると診断された。それを聞いてB子の両親は不安になった。B子の父は本部から指示があるまでは孫に邪気の入門を教えないことにした。

出産を終え、B子が別室に戻ってきた。奥の別室の事は忘れているようである。D子も定期コースに復帰した。

女たちの出産ラッシュも一段落して、美酒に酔う日々が過ぎていく。

A子の長男は高校生になり、夏休みに本部の道場での研修に通うようになった。祖父である男から入門を習っていたので呑込みが早い。

翌年、B子の次男も高校生になり、夏休みは本部の道場に通うようになった。事前に習っていないため入門からスタートしたのだが、祖父が道場の紅白戦の大将だっただけあり素質充分である。

B子の長男が大学生になり一人暮らしを始めた。邪気の使い手にはなれないのだが、本部の第二研修所に通うようになった。

F子の長女G子は大学生になり、先輩からもらったチラシを見て、男の長男からテストを受けたがクリアできなかった。帰り道に立ち寄ったレストランの特製スープに魅せられて、本部の第二研修所の合宿に参加した。

合宿の相手はB子の長男である。意気投合した二人は毎週金曜日に共に合宿することになった。

G子が合宿に通うことになり、その母であるF子は喜んだ。B子の長男が一歳の健康診断を本部で受けた結果、邪気の使い手にはなれないようである、と聞いた時から、ふたりが合宿で巡りあえばいいのにと願っていたのである。

B子の長男とG子は大学を卒業して、本部の第二研修所に勤務している。ふたりとも職員なので、合宿ではなく実習になる。ふたりが結婚するのは時間の問題なのだが、結婚すると実習できなくなるので、今は実習にこそしんでいる。